



## 大林組設計部の女性たち

女性活躍推進が叫ばれる昨今だが、大林組設計部では随分前から女性がいる風景は当たり前。意匠・構造・設備と、若手から管理職世代まで幅広く、数多くの女性がいまいきと働いている。今回は、全店でおよそ130名の女性設計者の中から、3名の女性設計者をクローズアップする。

**HITO**  
ARCHITORIUM



敷地の中を歩いたときの風景を想像しながら、植栽の配置をスタディ。模型だと建物と植栽のボリューム感がわかりやすく、全体のバランスがイメージしやすい。竣工後5年、10年と、樹木の成長と共にランドスケープも進化していくのが楽しみ。



建物内部からのランドスケープの見え方も、バースを作成して検討する。手を動かしてスケッチを描くうちに、様々なアイデアが生まれてくる。



意匠設計・ランドスケープ合同の打ち合わせも定期的に行い、方向性を確認し合う。建築とランドスケープが一体となった理想的なデザインを探り、活発な意見交換がなされる。

私は2015年、大林組設計部ランドスケープ課に数年ぶりの新人として入社しました。建築系の学科で学びましたが、「新しいことをするなら、ランドスケープに大きな可能性があるかもしれない」と思い、進路を選択しました。就職先としてゼネコン設計部を選んだのは、建築と一体となった、再開発や土木的スケールの大規模なランドスケープを設計したいと思ったからです。入社1年目で現場研修と設計部での意匠設計の研修を半年ずつ経験した後、入社2年目になり、ランドスケープ担当としての仕事がはじまりました。現在は、都内の研究施設建替計画に携わっています。新たに建てる建築との関係はもちろん、既存の施設や周囲の環境との調和を考え、イメージを描きます。その一方で、樹種や材料の選定、排水計画などの技術的な検討まで行うのがランドスケープ担当の仕事。周辺環境を含めた“全体”のデザインと、機能上必要な“部分”のデザインのバランスはとても難しい。だからこそ、“全体”から“部分”に一本筋が通った時がすごく楽しいんです。目標は、「ランドスケープからのアプローチで、建築のデザインの可能性を広げること」。敷地の中で建物の建たない余りの部分の設計をするのではなく、建物と一体となって敷地全体をデザインできるランドスケープアーキテクトになりたいと思っています。

## 目標は、ランドスケープで建築の可能性を広げること



**Mayuka Yoshikawa**  
吉川真由香  
本社 設計本部 プロジェクト設計部 ランドスケープ課

- 大阪府生まれ
- 2013 生活環境学部住環境学科 卒業
- 人間文化研究科住環境学専攻 修了
- 2015 大林組入社
- 現場研修／本社建築設計部
- 2016 本社プロジェクト設計部 ランドスケープ課

**Akiko Kashimata**

柏俣明子  
本社 設計本部 構造設計部

- 埼玉県生まれ
- 工学部建築工学科 卒業
- 1991 ● 大林組入社
- 本社構造設計部
- 2011 ● 名古屋支店構造設計部
- 2012 ● 名古屋支店構造設計部 課長
- 2016 ● 本社構造設計部 課長



チームで愉しくプロジェクトを進めるために

私は、構造設計部で課長を務めて4年になります。女性の多い大林組設計部といっても、まだ少数ない女性課長の1人です。

私の課には、男性の課員が3人。限られた人員で多くのプロジェクトを同時に進めるには、早期相談・方針決定ができる環境づくりが大切です。課員とはこまめにコミュニケーションを取るよう心掛けています。

ゼネコンの手掛ける仕事の多くは、1人でできないものばかりです。設計部だけでなく、施工、技研、見積、調達、営業といった他部門も含めた大林組というチームの力を合わせて、はじめて良い建物をつくることができます。そのためには、部門を越えたコミュニケーションがとても大切。人と人をつなぐことを意識して、積極的に他部門へ課員を紹介するようにしています。

一方で、構造設計の業務でも常にチャレンジ精神は忘れずにいたいと思っています。型に嵌った設計作業の繰り返しではなく、プロジェクトごとに様々な工夫をしたり、新しい試みを検討したり。課員や他部門の仲間たちとも一緒になって考えて、実現した時は仕事で最も嬉しい瞬間の1つです。

私のモットーは、「仕事は楽しくなくっちゃ」。大林組という組織の中で、色々な人を巻き込んで、良いものをつくる。しかも、明るく楽しく。その姿勢が少しでも課員に伝わり、受け継がれていけばとても嬉しいですね。



建物全体や部材のプロポーション、バランスの「ちょうどいい感じ」を目指し、チームで検討を重ねる。これまでの経験に基づいてアドバイスをしながらも、課員のフレッシュな意見にはっとさせられることもある。



現場で構造設計者が見るところは、竣工後は隠れてしまうところばかり。コンクリート打設前に、設計図書通りに配筋されているかを確認。実物を見ながら課員に教える良い機会でもある。



週に1度、終業後は社内の華道部の活動に参加。仕事とは異なるメンバーで集まって、その日の花を思い思いに生ける。オフの時間もきちんと楽しむことを大切にしている。



短時間勤務ということもあり、チーム内での情報共有・連携がとても重要。忙しくても、上司や先輩、後輩とのコミュニケーションの時間を大事にするよう心掛けています。



午前中は主に図面や資料の作成など、デスクワーク中心。午後は現場に外出することも多い。復職後短時間勤務になってから、より時間の使い方を意識するようになった。



保育園への送迎は、基本的に毎日しているが、仕事と育児の両立のためには、家族とのチームワークも大切。仕事の都合で時間通りの送り迎えが難しいときは、家族と交代。

入社以来、機械設計担当として多くの建物の設計に携わってきました。入社6年目で出産・育児休職を経て約1年のブランクがあり、不安でいっぱいだったのですが、会社に復帰の連絡をすると、上司から突然「電気設計をやってみないか」と提案されたのです。

機械か電気かは学生時代の専攻で分かれ、採用時も入社後も、いずれか一方を務めるのが通例です。上司の提案は、機械・電気の両方を熟知した設備設計者を育てるため、機械設計者に電気設計を担当させる「逆教育」という新たな試みでした。戸惑いはあったものの、育児明けの真っ新たな頭には丁度いいかもしれないと思い、引き受けました。

電気設計をやってみて、これまで機械担当だったとき、いかに電気設計者に助けられていたかを実感しました。機械設備の変更で電気設計に与える影響。何も言わなくても、機械設備に必要な様々な条件を見込んだ計画をしてきていたこと。いつも一緒に仕事をしてきたのに、意外と気付かずにいた仲間の苦労と有難さも、逆教育は教えてくれました。

将来は、機械と電気それぞれの特徴を理解しているからこそ導ける「最適解」を提案できる設備設計者になりたいと思っています。入社7年目になり、女性の後輩も増えてきました。ワーキングマザーとしては私も新米ですが、仕事も育児も前向きにチャレンジする姿勢を後輩に見せていきたいです。

育休後の次なるチャレンジ、設備設計「逆教育」



**Rino Daigo**

大郷理乃  
本社 設計本部 設備設計部

- 神奈川県生まれ
- 2008 ● 理工学部建築学科 卒業
- 工学系研究科建築学専攻 修了
- 2010 ● 大林組入社
- 現場研修／大阪本店設備設計部
- 2013 ● 本社設備設計部
- 2014 ● 出産・育児休職
- 2015 ● 本社設備設計部  
電気設計担当として復職